

慢性咳嗽の鑑別診断に試用する気管支拡張薬に対するアンケート調査

渡邊直人¹⁾、中川武正²⁾

城西国際大学薬学部薬理学講座¹⁾

白浜町国民健康保険直営川添診療所²⁾

【背景】慢性咳嗽の鑑別には気管支拡張薬での効果判定が重要である。我々は、先に長時間作用性 β 刺激薬を剤形別に比較し、安全性の観点から吸入療法が適切に行えれば吸入薬が診断的治療薬として最適であることを提唱した。

【目的】今回は民間病院に勤務するスタッフに協力してもらい β 刺激薬の剤形による印象をアンケートにより調査した。

【対象】佐々木病院(88床)に勤務する医師を除いたスタッフ115名。

【方法】アンケート形式で調査し、その回答を解析評価した。

【結果】1.単純に選ぶなら経口薬(44%)、次に貼付薬(36%)が多かった。2.用法を加味した場合は貼付薬(49%)が経口薬(31%)を上まいった。3.きちんと試用できるのは貼付薬(46%)と経口薬(36%)であった。4.診断的治療としては有効性(29%)より安全性(66%)を重視する意見が多かった。5.有効率の印象は吸入薬(45%)と経口薬(38%)が高く、6.副作用発現の印象は経口薬(63%)が高かった。7.年代別では小児が貼付、15-59歳は経口、60-75歳は貼付、75歳以上も貼付が一番を占めた。8.先発品(44%)の方が後発品(25%)より信頼度が高かった。9.実際の治療を考慮すると吸入薬試用の選択率が半数に増した。

【考察】一般的には経口薬か貼付薬が好まれるが、診断後の治療を念頭に入れると吸入薬の割合が高まる。小児と高齢者には貼付薬が適していると考えられ、また有効性より安全性を重視し、後発品より先発品の方が信頼を得ていた。